

平成8年3月13日第3種郵便物認可 1996年8月26日発行(第2・4月曜日発行)増刊

会員の誌代は会費に含まれています

聴能情報誌

みみだより

第3巻
第306号 通巻391号

編集・発行人：みみだより会、立入 哉 〒300-11 茨城県稲敷郡阿見町荒川本郷2150-1-1-203 電話：0298-41-7069 FAX：0298-41-5682

特集

パレスチナ・アトファルナ聾学校滞在記

5月19日

私はアジア中心の渡航歴ばかりでヨーロッパは初めて、約3週間という長期の海外旅行も初めて、本場の英語も初めてと、今回の旅は初めてばかりで、不安一杯の旅立ちだ。ロンドン・ヒースロー空港まであと30分という時間まで、機内でアラビア語教本に目を通したが、結局は「語学は一日にしてならず」という何とも情けない結果だった。

ヒースロー空港でトランジット。ラウンジではすでにユダヤ教独特の格好をした男たちの一群が、同じ方向に向かって祈りを捧げている。これから飛行機に、それも危険だという噂の高いイスラエルに向かう前に祈りを聞くのは、申し訳ないが気分の良いものではない。実際、いよいよイスラエルだと思うと緊迫感を感じる。とはいえ離陸後、すぐに寝る。

20日

飛行場には今回お世話になるキャンペーンの駐在員、南さんが待っていてくれた。車で一路、パレスチナ自治領との境界に向かう。やがて、検問所に着く。ここで空港からの車を降りる。まず第1関門。しばらく行くと、第2関門。パスポートを提示し、ビザのようなものをもらう。そこからは中立地帯。歩いて数秒で第3関門。パスポートを提示して通過する。迎えるベンツに乗るまで約5分ほどだが、この間、数十人はいただけるが、すべての兵士は常に機関銃から手を離そうとせず、監視の目が向けられている中を歩く。

早速学校に出かける。まずはJerry校長先生と談話。校長はアメリカ人であり、現在パレスチナ人と結婚し、パレスチナに住んでいるというから流暢な英語を話すが、日本人相手の英語が上手なのか、聾学校の教師故の話のうまさか、内容は半分から3/4はわかる。

実は朝飯を食べ逃してしまい、おなかが減っていた。スタッフが気をきかしてくれ、朝飯、ファラフェを食べる。ひよこ豆をパン状に焼いたものと同じくひよこ豆と野菜を油で揚げたものを、辛目に味付けしたものをはさんだもの。紅茶の味とも合い、至って美味。

その後、教務主任ハーシム先生の主導で、幼稚部から校内参観。どのクラスにも聾の教師がいて、指導のほとんどすべてが手話で行われている。どの教室にも、アラビア語の指文字が掲示され、幼稚部ではアラビアの手話によるカードマッチングが行われていた。まず最初に各カードごとに聾教師が手話を示した後、子



どもごとに教師が手話をしてから、どの手話をしたのかを目の前のカードから選ばせるというやり方だ。これでは、聴能訓練の時代と変わらない。変わったのはモードだけだ。これで良いのだろうかと思う。手話を学ばせることの是非はさておき（子どもの聴力を聞くと、中には70~90dBの子どもの多いと聞いたので、私は手話を使うことに賛成できないが）、聴能訓練時代の失敗を繰り返す必要はない。主体的に学ぶことを、生活の中で学ぶことの大切さを我々は学んだはずなのに！。現在、この学校にはアメリカから来ている手話を教える女性のボランティア（彼女はパイパイアプローチ主張）が常駐している。Jerry校長もアメリカ人であり、多分に彼女に影響されているのだろうが、モードの問題ではなく、幼児の教育をどのように考えるか、「言語指導」をいかに考えるかの点でも時間をかけてディスカッションする必要性を感じる。

幼稚部の遊びの時間、外に出て子どもたちと一緒にパレスチナの砂で遊んだ。どこへ行っても子どもは無邪気でかわいいもの、遊びも、そして人との関係の取り方も、実に楽しく、広がり、つながっていく。こうして子どもが遊ぶ時間は、クラス担任の先生にとっても休み時間になっている。本当はこうした遊びの時間の遊びの最中に子どもの興味は高まるのだから、この時を逃して、いいコミュニケーションの時間は作れないような気がする。

一通り学校参観を終えたときに、オーディオロジーセクションからお呼びがあった。まず補聴評価の話。補聴器のフィッティングは仮選択法で終わりであり、MS25のNAL IIの機能を使っている。音場での補聴評価が必要であるとのことを話し、原理的な説明をしたのだが、話し出したとたんに、メンバーから実に多くの質問を頂戴することになった。例えば、どうして仮選択法では良くないのかとか、音場での左右の音場閾値をそろえることが大切だといえ、ではどこの位の左右差から両耳装用ではなく片耳装用にするかなどの質問が相次ぎ、次にCROS補聴器の話に展開するという具合で、実に多岐にわたった質問が続くので、こちらも話しのし甲斐があるという感じだ。両耳装用の話してから、両耳耳加算効果の話しになり、次に10log・・・の話、戻って、音とデシベルの基本的な話しをすと言った感じなので、系統的というより、その場その場で必要なことを2歩進んで1歩戻るような感じで説明をしていく。しかし、彼らからの質問に応じて、話しを進めた方が現実的に埋めるべきところを適切に埋められるような気がする。

この日は校長先生と一緒に海岸近くのレストランに行き、一緒にランチをとる。値段的にはほぼ日本での値段と同じ。現地の魚（ロックス）のフライと、エビを焼いた物をいただく。至って美味。

食事をしながら、モードについて質問をした。Jerry校長は、パイパイアプローチをここで実践したい意向で、トータルコミュニケーションについては、聴覚と視覚の統合が頭の中でできるとは思わないとの考えで反対の立場だという。しかし、パイパイのデフカルチャーが聴者と分離するような考えには同意できないとも話し、このあたりでは一応、私も納得した。しかし、今日の参観の結果からも、70~90dBの子どものみでの教育を受けており、私はHARD OF HEARINGの教育について質問したかったが、もう少し学校の実態を観察した上で話そうと思ひ、とりあえず、この日は帰宅する。

帰宅後、倒れるように睡眠。私のように英語力が十分でない者にとっては、英語を聞いているだけで重労働で、まして話そうと思うと、全身から汗が出る苦勞をするわけで、その上に、こちらの思っていることが十分に話すことができないストレスもたまり、夕方5時頃から本当にぐったりと寝込んでしまった。

21日

早朝、鶏鳴よりも早く起きる、と言うより起こされる。近くのモスクからコーランが聞

こえてくるのである。登校は、とりあえず大通りまで歩き、そこでタクシーを拾う。市内どこでも乗合タクシーは、1シェケル、日本円で35円也。タクシーに乗ったと思ったら、1分で学校に到着。砂漠の砂の上を歩き、1日が始まる。

午前中は、南さんと前日にオージオロジーセクションで話したことを確認。今回、私の英語力の貧弱さから南さんに通訳をお願いしていたが、結局、専門用語が出てくると十分に伝わらず、結局、私が絵を描いたり、実際にやったりと、そしてそれに英語をつけながら、説明せざるえないことになった。

その後、実際にオージオロジーセクションの部屋で、とりあえず、観察をすることになった。外来で来る子どもの多くは、いわゆる伝音性難聴で、骨導は正常閾値なのだが、外耳・中耳に疾病等があり聞こえにくい子どもである。幸い、インピーダンス・オージオメータがあるので、ほとんどが中耳炎を推測する鼓膜の動きがない、あるいは鼓膜の動きが良くないという結果が得られる。気導聴力が50dBにもなっている子どももいて、中耳炎の治療は大きな課題。そうした子どもは耳鼻咽喉科を紹介してサヨウナラ。

何人かの重度難聴の子どもも来る。子どもたちの多くは最初から耳かけ形補聴器を両耳に推薦され、使用している。補聴器はヨーロッパ諸国からの援助が多く、WidexとPhonakが大半で、Danavoxの中近東諸国向け製品が少しあるという感じである。補聴器の修理やイヤモールドの製造は、ここのオージオロジーセクションでできる（この面では日本の聾学校よりも数段も先を進んでいる！）ので、修理がしやすい補聴器を選ぶことも肝要だそうで、Phonakの製品はスタッフに大いに受け入れられていた。もちろん、キャンペーンを通じて寄贈された補聴器もあり、そうした日本製の補聴器の修理もセクションで行える。

補聴器修理やイヤモールド製造のスタッフは2人で、別に助手が1人付いている。彼らの技術的レベルは結構高く、耳あな形補聴器の修理も学校内で行える。日本の聾学校でも早くこのくらいのスタッフを抱えられるぐらいに成長して欲しいと思う。修理スタッフの今、何が必要かと尋ねると、1つは故障したレシーバの代替のための新しいレシーバがないこと、2つ目は補聴器のケースなどのパーツが手に入りにくいことの2点であった。1つ目は補聴器用レシーバを作っているアメリカ・ノーリス社に相談することを提案し、2つ目は、私の方から日本の補聴器販売店にお願いのFAXを書くことを約束した。

サンドイッチを食べ、午後、音場聴力検査のためのセッティングの話をする。AC30の音場で音を出すためのスピーカと内蔵アンプの接続、ウォーブルトーンの出し方がわからず、日本聾話学校の加藤先生にFAXを送る。AC30が思うように動かないため、手法のみを口頭で話し、日本から持参したビデオテープを見ることにした。「FM補聴器の使い方」と私が1歳の乳児をVRAで聴力測定している場面。電車が回る遊技聴力検査は知っていたようだが、ピープショーや、COR、VRAは、彼らにとっては、新出単語。しかし、光刺激を出すハウスがないため、音刺激と光刺激を出すタイミングなどは十分に説明できなかった。南さんに日本語で説明しても、結局、聴力検査の概念的なところがわかっていないと、通訳にも限度がある。ひたすら、我が英語力の乏しさを思い知る。光刺激を出すためのハウスは現地で作ることにして、聾の木工師の手配をお願いする。

オージオロジーセクションのスタッフであるヨーセフ氏から自宅に招待されていたので、イーハフの車で自宅に向かう。1000年以上の歴史を持つというモスクの近くの伝統的な家。これもまた1000年ぐらいの歴史があるという石の煉瓦で組まれたアーチを家の一部に取り込み、中庭の周りに部屋を配置した見事なお宅。着くと、早速ディナーが始まる。グレープの葉にご飯をくるんだもの、ウリの中をくり抜き、そこにご飯を詰めたもの、オリーブの酢漬け等々いただく。どれもこれも、日本食に通じた味付けが一部にあり、至って美味。こちらの食事の時間はこのような感じらしく、食事後もフルーツや紅茶が出て

きて、延々と話しをする。結局、6時過ぎまで、様々な客人が来て帰りながら、ずーっと話しをしていた。私はアラビア語と英語の聞き分けが難しい中、なんとか話題に沿って話の中身をつかみ、一緒に楽しみたいと苦勞する。話といっても、結構ジョークが多く、そのジョークがわかれば、楽しい話となるが、ジョークのセンスには多少の国境があり、何がおかしいの?というわかりにくいジョークも出てくる。ヨーセフ氏のお父さんは、現地で「ハッジ」と呼ばれるイスラム教の聖地メッカに行ったことのある方であり、現地の人からは尊敬の目で見られる。このことから先生のこと「ハッジ」と呼ぶこともある。ところで、私の名前は「はじめ」であるが、正確に「はじめ」と呼ぶのは難しいとのことで、現地で私はたとえば「ヘィ、ハッジ」と呼ばれていた。

帰宅後、どうしてもビールが飲みたくなる。イスラム教の掟で、飲酒は禁じられていて、市民もそれを守っている。それゆえ町中でアルコール類を手に入れることができない。汗をかき、疲れて家に帰った後は、やはりビールだと、ビールを探しに国連のビーチクラブにでかけることにした。このときだ、ハツと気が付く。南さんに生活のすべてを任せていたので、自分で現地の通貨である「シェケル」を持っていないことに気付いたのだ!。ビーチクラブは国連関係者や外人以外は入所禁止だというくらいだから、US\$で払えるだろうと取りあえず出発した。ビーチクラブに着いて、ビールを調達しようと思ったが、クラブ内での飲酒に限られ、持ち出し禁止と聞き、これではシャワーの後の爽快さは得れないと断念、帰路につく。復路、タクシーで帰りたい気持ちだったが、タクシーの運転手に家の場所をアラビア語で説明することはできず、また、通貨「シェケル」も持たず、結局20分ほど歩く。持参の日本酒を飲み、爆睡。

22日(木)

日本聾話学校の加藤先生にお願いしていたAC30の取り扱いについての解決法FAXを受け取る。こういう危機的場面で早速のお返事を頂戴でき、本当に感謝。午前中、外来の相談の合間をぬって、音場の校正をしようとするが、やはりウォーブルトーンが出ず、取りあえず、バンドノイズを使うことにする。校正をしながら、スタッフを集め、音場聴力検査の評価の話しをする。また、私が作った補聴器のフィッティング支援ソフトを見せる。スタッフ一同より感激の声を頂戴する。プレイハウスを作ってくれと言う聾大工が来たので、ビデオを見せ説明する。帰国までの完成を願いながら、簡単な設計図を渡す。

南さんと買い物に出かける。当分の食料を調達するために、八百屋に向かい、野菜とフルーツを買う。グレープフルーツは高価だが、本場だけに美味しい。その他、ビワとスモモを購入。2つとも、よく言って野趣的、悪く言って苦みがありうまくない。

午後、アトファルナ聾学校の4歳の誕生日パーティ。パーティといっても、もちろん飲み物抜きで、アップルパイを食べるだけで終了。結構、感激は薄い。

その後、目標装用閾値の設定の話しをする。同じオージオロジーという畑にいと、言語の問題を越えて、結構分かり合えるもので、何となく分かってくれた様子である。

帰宅後、^{UN}国連ボランティアとして活躍している本間さんと、UNの車で、イスラエル占領地までビールの買い出しに行く。途中、厳しい検問。南さんがビザの延長の都合で、パスポートを持っていなかったのが、結構難渋した。この間、約10分ほどだろうか、2人の兵士(もちろん、機関銃携帯)に見つめられながら、あれやこれやと言い合う。結局、占領地への入境は許可され、本間さん、本間さんの運転手、南さん、私と4人でイスラエル占領地内のパーのような場所に行き、イスラエルのビール、マカビー10本と、イスラエル産のウオッカを購入する。合計で40\$を払い、2シェケルのお釣りをもらう。初めて手に入れた現地通貨に喜ぶ。帰りは無事に検問をパス。イスラエル入植地(占領地)は

確かにきれいに整地され、同じような家が立ち並んでいるが、どこも生活の臭いの少ない街で、パレスチナ側に戻って、人々の生活が見えてくる。

23日(金)

現地の休日。1日中寝て暮らす。

24日(土)

ハンユニスのユニットに行く。「ユニット」との言い方の広義さを知る。スリランカで「ユニット」というと難聴学級のことだったが、ハンユニスのユニットはいわばアトファルナの出張所という感じ。途中、イスラエルの占領地を横目に見ながら、車で30~40分でハンユニスの町に着く。

ハンユニスのユニットは、特性検査装置AS25の他、オージオメータ、インピーダンスオージオメータが完備され、コピー機もあるほどの完全なオージオロジークリニックである。アトファルナの先生や壘大工共同で自作した測定室は結構、外からの音が漏れ聞こえてしまうが、とても自作したとは思えない完璧な物。驚く。ここで、語音聴力検査の話をする。数字の検査、2音節、3音節、1音節と2音節と3音節とを合わせたテストなど紹介するが、どのようにテストをするか、テープをいかにして作るかなど課題は山積。アトファルナの機材だけでは語音聴力検査用のテープを作るのは難しいと思うが、とりあえず作り方だけでもアトファルナで実演して、実際に使うテープは日本で編集せざる得ないだろうと思う。しかし、アラビア語を解しない私にとっては、少々荷が重い。語音聴力検査の話をした後、オープンイヤゲイン・インサージョンゲインなどの話と実際の測定を試みる。しかし、被験者が聴者だから、非常にわかりづらい。さて、ここで停電(power cut)の話し。パレスチナでは停電は珍しいことではなく、ほぼ毎日、非定期的に突然と停電する。オージオロジーの話をする際に、停電ぐらい頭の痛いものはない。オージオメータなどは一切使えない。幸い、アトファルナの学校は、自家発電のための発電機を持っていて、けたたましい音とともに部屋の電気がつくが、完全な防音室などなく、今度は騒音に泣かされる。電気が止まれば、機器が使えないし、自家発電に切り替えれば、騒音で何もできないと言う案配だ。

ハンユニスでの講義後、アシュラフの家で昼食をご馳走になる。モロヘイヤのスープや、チキンの丸焼きまで出て、本当に贅沢な食事をご馳走になる。

帰宅後、帰路途中で購入したツナ缶を開け、カニ玉ならずツナ玉を作るが、美味しくできず、缶にわずかに残ったツナをツナだけで食べて驚愕、ツナ缶はツナ缶でも日本のツナ缶の味とはだいぶ異なり、塩味が少なく、油っこく、失敗の原因を知る。

25日(日)

金曜日が休みの習慣の国、日曜日は学校を含め、すべての産業が正常通り営業する。

午前中にさすがに日本食というか魚を食べずに来たので、どうしても魚介類しよくを食したくなったために、魚市場に案内してもらおう。鱈1匹、生きエビ500g、サヨリ2匹、小鯛4匹で30シェケル=約1000円。エビで、しっぽの色などから日本でいう車エビである。

外来に2歳の子どもが来る。3mぐらいの高さの所から頭から落ち、舌を縫う大きなけがをしたという。舌の傷はそれほど大きくなく、チョコレートを食べている感じにはそれほど違和感がない。しかし、父親曰く、落下後、何も話さなくなったということで、来校したが、聴力は正常であり、お引き取り願う。本来ならば、何らかの心的なケアが必要なケースだろうが、こちらではどこにも紹介する先がないというのが実情のようだ。次に見

るからに中耳炎という感じの女子が来る。骨導はほぼ正常(約20dB)だが、気導がなぜか80dBを越す結果となる。インピーダンスの結果は完全なフラットで、耳鼻科的治療を要するケースだと思われる。しかし、現地では通常の中耳炎の治療の上の、いわゆるチュービングといわれる鼓膜にチューブを挿入する治療は高価であり、家の事情によってはそうした治療を受けさせることができないと聞いた。医療保険制度がなければやむ得ない事情だが、何とかしなくてはせつかくの言語習得期、言語入力が貧弱のままに過ごしてしまうおそれがあり、大変心配な事項である。

11時からJerry校長と面談。最初にずばり「補聴器はどのような目的で装着させているのか？」と聞く。結局、アメリカから聾の団体が来て、パイパイアプローチの話をして、聴覚口話はナンセンスだと言ひ、帰っていったことがあり、校長自身、頭の中が混乱しているが、私の意見には賛成だということで落ち着く。使える聴力があるならば、使えばよい。もちろん手話の使用を否定するのではなく、アラビア手話の場合、アラビア語とマッチしている(=口語文の語順に手話の語順があひ、単語にも対応関係がある)ならば、教師が声に手話を付けることは可能である。その他、音環境の貧しさも指摘し、それについてはこちらから改めて具体的に提案することになった。その他、2歳児以下の学級を作ることを提案、これに対してJerry校長から、家庭の事情から母親が学校に子どもについてくることは難しいこと、すでに学校は満杯であり、経営的にも教室や教師の余裕もないと説明を受ける。そこで、早期から教育を開始すれば、教育を終えられる年齢を下げられるから、長期的に見れば、経済的には同じになること、2歳児以下の学級については、週に1回か2回の登校が良いと思うことを説明、納得していただける。せつかく早期に発見されながら、Waiting Listに入れてしまう=入学を待たせることはあまりに無駄な話である。

お昼、外来で来た子どもの親の差し入れのひよこ豆パンの間に肉をそぎ落としたものをはさんだものを食べる。少々酸っぱいが、薄目の味付けでそれなりの味。

午後、成人難聴者を呼び、実際にファンクショナルゲインの測定を行う。しかし、特性検査装置の印刷機能がうまく働かず、十分な説明ができなかった。補聴器のフィッティングは臨床で学ぶのが一番だと思うが、午前中は外来、午後になると、スクールバスで子どもを帰宅させる必要があり、なかなか時間設定がうまくいかない。その後、FMシステムの評価の話。現在、FM受信機からの音をタイループで聞かせているが、これでは十分な音量を得ることが難しいことを説明し、受信機のボリューム設定について話す。実際、授業中に教師の声が聞こえているようには思えず、聴覚活用を考える上で大きな問題だと感じるが、シルエットインダクタはないし、外部入力用のオーディオシューの入手もままならず、いかにFMを効果的に使うかは今後に期待するしかない。困った。

最後に私の徳島聾学校時代の養訓の風景をビデオで見せる。100dBを越えている子どもが話しているので、スタッフ一同が驚愕する。声を出していることだけでも驚きのようで、補聴器をつけているだけでは何の効果も生まれぬことを私自身思い知る。確かにアトファルナの子どもたちは補聴器を付けているが、100dBを越える子どもは声を発することができないでいる。補聴器のフィッティングにも問題があるかもしれないが、一番大きいことは、補聴器を活用しようと言う環境であり、教育であることを知る。明日にでも、この辺をさらに強調する必要がある。

帰宅後、一人で買い物に出かける。タクシーをつかまえ、行き先と値段の交渉を地図と身振りでする。スーパーの前で Here, here, please stop と言ひ、スーパーにたどり着ける。魚焼き器、アルミホイール、ソースなどを購入。店を出て、さらにタクシーをつかまえ、八百屋に着く。インゲンとグレープフルーツ、茄子、ジャガイモを購入し、またタクシーで帰宅。いつでもどこでもタクシーをつかまえられ、市内ならば、1シケル(35円)と

というのは結構便利だが、行き先を交渉しなくてはならない乗合制は外人にはつらい。

帰宅後、晩飯として天ぷらを作るが、エビはさすがに美味だった。その他、インゲンと茄子を天ぷらにする。我ながら上出来で、久々のgood日本食に思わず感激。やはり日本食はウマイ！と自己納得。

26日(月)

午前中、幼稚部の子どもを2人、音場で装用閾値検査をする。最初の子どもは、聴力が500Hzで110dB、1kHzで120dBスケールオーバーになる子どもである。この子どもはアトファルナに来る以前に補聴器の交付を受けたそうで、その補聴器を装用した状態で閾値を測るが、ほとんど反応できない。補聴器の利得を調べる以前にPR48電池使用の補聴器を選ぶなど、聴力を考えたとはとても思えない選択であることがわかる。そこで、臨時に他の補聴器に変えて測定しようとするが、ハウリングが起きてしまい、思ったボリュームで補聴器を使うことができない。結局、250Hzで70dBが補聴器装用下で聞こえるようにはなったが、臨時の補聴器なので、結局、彼女は、また元の聞こえない補聴器をつけて教室に戻ることになってしまった。補聴器の交付や補聴器の機種変更については、現地の補聴器ドネーションシステムがまだ完全に飲み込めていないので、よくわからないが、とにかく、今聞こえていない子どもを目の前にしている私の悲壮感は、なかなか実感としてスタッフには通じにくかったように感じた。次の子どもも聴力的に非常に重い子どもであり、この子の場合の、ほとんど補聴器を付けているが聞こえていない状態であった。補聴器のフィッティングは、結局、イヤモールドの問題に終結する。アトファルナの場合、イヤモールドを自校生産しているからこそ、いかに良いイヤモールドを作るかが難しい。つまり、簡単に良いイヤモールドラボに変更すると言ったことができないし、自校生産ゆえに、自校内の技術アップを待たなければならず、そのために費やされる期間はハウリングが起きるイヤモールドしか使えないのは残念なことだ。また、欧米の特許を取っているような新しいイヤモールド材料は、特許の関係で、非営利的なアトファルナで利用することは難しいと思われる。

2人の装用閾値検査を終えた時に、スタッフの一人が、「私たちは今まで補聴器を付けた状態で検査をしなかったので、補聴器を付けた状態で、子どもがどのくらい聞くことができるか理解できなかった。しかし、装用閾値検査をして初めてよくわかった」と話してくれた。装用閾値を測ることの重要性を身を持って感じてくれたようで、本当に安心する。

その後、幼児聴力検査用のハウスを作るために、電気パーツ店に向かう。さらに大工の工場に、完成したハウスを取りに向かう。あまりに立派なハウスができてしまい、驚く。立派すぎて重いという難点を抱える。アトファルナに帰還後、電気パーツを取り付ける。

午後、SRTを求めるための語音聴力検査用のテープを録音する。いい録音用のテープレコーダがなく、散々苦勞してシステムを作る。今まで語音聴力検査用のテープがなかったので、初めてのアラビア語のテープになるかも知れないと思いながら作るが、何せ完全な防音室はないし、テープレコーダはソニーのKid's PLAYというようなおもちゃだし・・・と悪条件が多く、決して良い音質とは言えないものができあがる。しかし、なんとか完成し、実際に語音聴力検査をやってみる。スタッフ一同、「なるほど」といった雰囲気。

その後、私の養訓の授業のビデオの続きを見る。

6時からヨーセフとイーハフとレストランに行く。ピザを食べ、雑談に興じる。ようやく、英語を日本語になおして理解するのではなく、英語をそのまま英語で理解できるようになったように思える。はっと気付くと、次にいう事を英語で考えている自分に気づき、少し喜ぶ。3時間ほど、水たばこを吸いながら、海岸のハイファ・レストランで過ごす。



写真：左からアシュラフ・ヨーセフ・イーハフ

帰宅途中、「モロヘイヤを料理したい」と私が話したのをヨーセフが思い出し、彼が道にいたモロヘイヤ売りからモロヘイヤを買ってくれた。こちらでは家族構成人数が多いためか、1kgで売れる物が多く、閉口する。私のような外人が八百屋に行くと、1個とか2個でも売ってくれるが、モロヘイヤを1束とかいう売り方はなく、1kgのモロヘイヤを花束のように抱えて帰宅する。帰宅後、イスラエル製ウォッカで寝る。

27日(火)

朝6時に起き、鱈を焼く。インゲンの煮付け、残っていたエビの天ぷら、モロヘイヤを炒めたもの、日本から持参の即席味噌汁と大変贅沢な朝食となる。

今度アトファルナの学校を新築するそうで、そのオージオロジーセッション室の設計について相談を受ける。防音のための材料が入手できる環境ではなく、答えに窮する。しかし、当初の設計では、道路に面したトイレの隣の部屋になっていたもので、これでは騒音源と近すぎると提言。さらに暑い日が多いので窓を付けたいという希望だったが、エアコンをつけることを懇願し、開閉できる窓はあきらめるように提言。その他、せめてドアだけは、遮音ドアを入手するよう申し上げた。材料が入手できない環境で、良い防音室を作ることは難儀なことだと思案する。

午後、私にはあと2日しか時間が残されていないことを話す。どうも、伝わり方が悪く、私は6月11日まで滞在すると聞いていたらしい。オージオロジースタッフ一同、結構びっくりしているので、こちらもびっくりする。午後、単語の受聴明瞭度を測定するための単語リストを作り、聴力検査用のハウスをほぼ完成させる。

14:20、アメリカ人ボランティアの宅で、パレスチナの壺で作る伝統料理を頂戴する。いろいろなスパイスがきいていて、いわゆるドライカレーの味に似ているもの。美味。

28日(水)

朝食。インゲンと卵のチャーハン。即席マグヌードル。ミニお好み焼きを作る。スタッフのみんなが日本食を食べたいというので、お好み焼きを考え、ソースをこちらの材料で作ろうと試みたが、うまくできない。取りあえずの試作ソースで試みたが、やはり今一。

午前中、聴力検査用のハウスを完成させるため電気部品の購入にでかける。トランスやダイオード、ビデオカセットのヘッドまで売っているような店で、「ガザにこんなにいい店があるとは思わなかった」と話すと、ヨーセフも「昨日知った」というので、「ガザに

は何年住んでいるのか」と聞くと「27年」と大笑いで答えてくれる。とにかく冗談を欠くことがないくらい、冗談が好きで、私の冗談も結構わかってくれて助かる。

その後、ABRで難聴を指摘された子どもが来る。今までの、オーディオロジーセッションがやっていた積み木メソッドでは反応が得られず、今日中にハウスが完成する見込みだから、明日、再度、来てもらうことにする。しかし、インファントオーディオメータで500Hz 80dBの反応が、1回だけであったように見え、太鼓の音で(+)の反応が得られる。今まで、ここでは、BOAで聴力を評価することをしておらず、今回、BOAでの評価ができるようになってくれたことは、大変うれしく思う。

次に、学校の比較的聴力の良い子どもを呼び、初めてのスピーチテストを試みる。1音節・2音節・3音節の単語を4個ずつ使い、単語了解度・パターン了解度を知ることができるリスト。裸耳・音場で55dBぐらいの子どもにやってみるが、読話付き・読話なし大きめの声・読話なし普通の声の大きさの3条件で行い、了解度が見事に15%ずつ低下し、検査の要領を知ってもらう。スタッフ一同、初めてのスピーチテストに喜んでくれた。

その後、ハウスが完成。結構かわいい物ができ、それこそ学校中の先生や事務の人まで来て、完成を喜んでくれる。結局、私はハウスの前でポーズをとられ、写真を撮られる羽目になる。出来もよく、スタッフ一同使い方をマスターしてくれたので、明日の聴力検査が楽しみだ。そして、何よりも、設計から部品の調達、配線まですべてスタッフと一緒にしたので、スタッフも愛着をわかせてくれているように思えて、本当にうれしく思う。

午後、耳かけ形補聴器のピークのことを話す。ES2Tなどの特殊なフックに対する対応の仕方を含め、話してはみた。今回、私が日本から持参したノーリス社のダンパーを使って自作ダンパー入りフックを作り、測定し、実感してもらったが、肝心のノーリス社のダンパーを継続的にこちらで入手可能かどうか問題は残る。こちらには、補聴器を寄付してくれる団体からサポート

を得ており、ダナボックスの125ppがBE25、フィリップス製がBE27、オーティコン製がBE568など、頭にBEと付く特殊な名前が付いた補聴器を使っている。オーティコン製の補聴器などは日本では全く見たことのない補聴器で、おそらくBEとの略称の大きな団体が寄付専用で作らせているように思える。

次にFMについて、大論議。私はタイループしか使えない環境ならば、とても十分な利得をFMシステムから得ることはできない。Tのみの補聴器を使っていると、結局子どもたちは何も聞いていない状態なのだから、FMシステムを使わない方がよいと提案。一方、スタッフ側には、FMに対する信奉があり、「いやFMを使うことが良い」との意見を譲らず、激論。しかし、結局、一応はわかってくれたらしく、シルエットインダクタか、オーディオインプットシステムに移行することで、同意。

さらにイヤモールドの外耳道部分の長さで激論。あまり長くすることは良くないと以前



学んだらしく、それはそれでやってきたプライドもあり、説得に時間がかかる。結局、ハウリングが起きないのであれば短くても良いが、ハウリングが起きるようでは補聴器を適切に使えないのだから、長くすることも必要だという事で合意。次に採形の方法について、私は子どもを泣かせずに、人形などを使って子どもに痛くないことをわからせるようにしてやるべきだと主張するが、1日に多くの子どもが来る現状では、一人にとってもそんな時間をかけられないという主張で戦う。結局、次回来るという場合は予約を取るような予約制を考えること、泣いている子どもを押さえつけ、無理矢理採形するための時間より、子どもに説明してスッと採形できれば、その方が早いのではないかと提案して、合意。

最後に、日本から持参したビデオを見る。FMに関するビデオからS/N比の話しをする。次に歌と踊りのビデオを見せる。100dBを越える子どもが歌っている姿をみて、「どうして歌えるのか」と驚くので、私は逆に「ここに来て、100dB前後の子どもがどうして声が出ないのか驚いた」と答える。「なぜか」という問いに「聞こえなくて話せない」と話し、FMシステムや補聴器のフィッティングが十分でないことを話す。彼ら曰く、「今回、あなたからその辺を教わったので、5年後には子どもたちは話すようになっていだろう」と話してくれ、今回のプロジェクトの成功を信じる。

19時からヨーセフ・アシュラフ・イーセフの3人とサマーランドレストランに行く。アシュラフは学校を終え、ハンユニスに帰宅後、わざわざガザの街に戻ってきてくれた。紅茶・コーラを飲み、水たばこを吸いながら、2時間ほど冗談を言い、日本の結婚事情を聞かれたり、様々な話しをする。イスラエル占領時代は、車の中に車の修理用に小さなナイフを入れておいただけで、機関銃を突きつけられ、何のために持っているのかと詰問されたなどの話しを聞く。隣国イスラエルは今日、総選挙があり、ガザの人々はその結果を心配している。当時の首相ペレス氏は平和維持派だが、右派政党が勝つと現在の平和に影響を与えるだろうと考えているからだ。自国の平和について、他国の選挙が大きく影響する、あるいは自国の平和のために一票を投じれないというのは妙な話だ。パレスチナには切手があり、アラファトを長とする自治政府があるが、流通している通貨はすべてイスラエルシェケルだというのは、今までの歴史を考えたとしても、やはりイスラエル側に有利な有益な平和であることに間違いない。レストランの前の海に出て、その美しさに驚愕した。もちろんゴミはないし、貝もないまっさらな砂が延々と続く海辺はまさに見事な物だ。満天の星を見ながら、この地にいることのできる喜びを味わう。しかし、パレスチナの海は海岸より1kmと定められていて、それよりも沿岸はイスラエルの領海となっている。私たちにとっては、まったくばからしい話だと思うが、1kmラインの漁業で生活を強いられているこの地に住んでいる人にとっては、まさにこれが現実なのだと思うと、せめて、魚が領海を行き来でき、パレスチナの領海に泳いでこれることを喜ばずにはいられない。

帰り道、「2週間前はどんな日本人がオージオロジーセクションに来るか不安ではなかったか？」と聞いてみる。「年をとった、冗談など言えぬ、英語の上手な・・・」と、だいぶイメージが違っていったような感想。でも最後に「ハッジには冗談も言えるし、本気で話せるし、だから、あなたは私の先生だし、友達だ」と話してくれ、「来て良かったなあ」と思う。「夏にもう1度来い、そしたら、泳げる」「好子田中にハッジがもう一度ガザに来れるように頼んでみる」などと言ってくれる。最後にヨーセフが「ハッジが去るときには泣いてしまうだろうけど、ハッジは泣くな。別れられない」と言われる。この2週間、私も全身であたってきた。それだけに、オージオロジーのスタッフとは本当に仲間としてやってきた。別れがたい。たぶん、もう2度とこんなに遠方のガザに、こんなに長期にわたって来ることは難しいだろう。だから余計に悲しい。もう二度と会えないのではないだろうかと思ってしまうから・・・。

29日(木)

アトファルナ最後の日。

すべてが別れ難く、すべてを思い出に、そして、すべてに平和を。

オーディオロジーのスタッフには、結構言いにくいことも言ってきた。この子らのためにわずかでも何かを残したいと思ってやってきた。無心に遊ぶ子らを見て、2週間の充実感と、2週間の短さとを同時に味わう。スタッフ一同の今後の活躍を祈る。

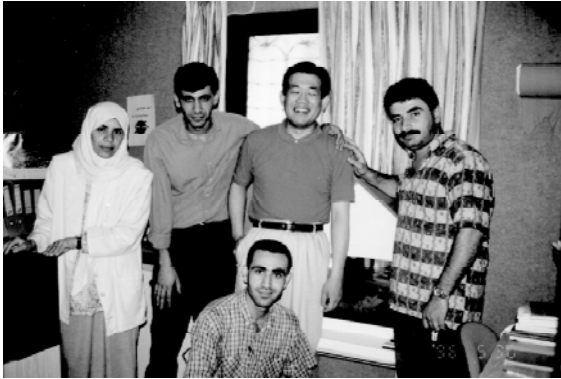
登校すると、オーディオロジーセクションのスタッフ一同が部屋に揃い、何かそわそわしているの、「何かあるな?」と気付く。私への謝辞と記念品を頂戴する。思わぬプレゼントにそれこそ泣いてしまった。「泣くな、泣くな、泣いているのを見ると、私も泣きたくなる」と言われる。両頬にキスをされる。男の人にキスをされるのは初めてで少々仰天するが、これもアラブ式の最大の挨拶。

午前中、予定していた昨日の子どもを待つが、なかなか来ない。その間に、老人の外来。イヤモールドのフィット感が良くないらしく、いろいろとトライしてみるが、結局、新しく作った前のイヤモールドの方が装着感が良いと言って新しいイヤモールドを使おうとしない。しかし、聴力の低下があり、ボリュームを上げて使おうとすると前のイヤモールドではハウリングがおこる。だから、聞こえない。この繰り返しなのだが、新しいイヤモールドの形にずいぶんと修正を加えることで、満足して帰ってもらう。

昨日来た子どもが来る。最初VRAの手法で検査をしようとするが、すでにVRAの年齢としては高すぎるのか、1、2回の反応は得られたが、それ以後、反応が見られにくくなる。そこで、PLAYの手法に変えてみると、これが思う以上にはまってくれ、無事に検査ができた。ホナック・スーパーフロンテPCL4をボリューム3で使った状態で音場で125Hz 75dB、250Hz 80dBで反応が得られる。昨日、今までの積み木メソッドで検査できなかったが、今回作ったハウスを使うことで、検査ができたことで、一同、子どもの反応1回1回に喜んでくれる。検査結果から思うに、かなり最重度の難聴が疑われる。ボリュームを3以上にあげるとハウリングが起きることから、耳型を採形しなおす。今回、私が日本から持参した綿球を使用して採形する。外耳道部を短く切らないように指示する。次回、うまく補聴器が使えることを祈るのみである。検査後、このケースの今後について、ディスカッション。

その後、買い物に出かける。今日は、南さんの誕生日パーティがあり、その席で、日本食を提供することを約束していたので、エビなどを買いに出かける。こちらは、海産物は魚屋で、野菜は八百屋でという具合で、スーパーですべての物を調達することができないので、魚介類は魚屋の営業時間=おおよそ午前中のみしか購入できない。車エビ、500g、約30シケルで購入。その他、鯛の大物が並んでいた。もちろん完全天然物で、活きも良さそうで、日本だったらすぐにも買いたくなるような一匹。結局、これ一匹を買っても料理のしようがないと思いきらめる。次に肉屋に行く。肉を買うのは実に大変な作業だ。肉屋には牛がそのまま吊されており、具体的に「この部分をどれだけ、どのように切るか」を説明しなくてはならない。日本人のようにスーパーでしか肉を買わない人にとって、牛のどの部分がどの用途に向いているかなどわからず、取りあえず、よく見る色の肉の部分を500gを薄目にそぎおとしてもらう。

午後、防音室内にも大人用のスピーカが欲しいというので、設置し、騒音計で校正する。もう手はずもわかってくれていて、すんなりと校正が終わる。スタッフ一同飲み込みが早いので、本当に助かる。その後、朝の聞こえ方チェックの話しをする。今はオーディオロジーのスタッフが確認をして回っているが、確認と言っても電池の残量と補聴器からの音を調べる位なので、それならば、教室担任によるSAT(声の有無に気付くかどうかの簡



単なテスト) をしてもらった方が、担任が子どもの聞こえの状態を把握できるし、オーデオロジーのスタッフの負担も減ると提案。受け入れてもらえる。

私が今回の企画で考えていた内容はすべて終わったので、後はスタッフからの質問を聞きたい旨、話す。聴能指導、発話指導、言語指導のことなど聾教育に関する質問が出る。そういえば、今回、聾教育に関する話し

はまったくしなかった。聴能指導については、いわゆる特設養訓については多少の話はしたが、関する養訓の話はしなかった。しかし、最後に、生活の時間すべてが聞こえについて配慮をすることで、聴覚活用につながれることを話す。この辺の話は実際にどのように配慮するのかを具体的に示さなくてはいけないと思うが、学校の生活自体が日本と異なるため、話すことだけで示すのは難しい。

帰宅後、買い物に出かける。テレホンセンターでFAXを送信。アメリカ宛て、1枚10シェケル。その後、卵10個を買う。こちらはだいたい大家族なので、卵とかの販売単位が大きく、ちなみに卵は50個くらいが標準だし、油は1kg以下では買えないのだが、なんとか10個で売ってもらえる。

エビチャーハン、お好み焼き、肉じゃが、天ぶら(茄子・タマネギ・エビ・インゲン・ピーマン)を作る。どれもほぼ成功。お好み焼きはやはりソースがこちらでは入手できないので、自分であれこれと合わせて作ってみたが、やはり今一だった。7時に迎えの車が来たのに、天ぶらが完成せず、車を待たせる。UNDPの本間さんを待ち、一緒に出発。

パーティ会場となった幼稚部の先生のお宅は4建ての豪勢なお宅でたまげる。私の持っていった日本食は結構評判良く、特に肉じゃがには人気があった。魚ベースに醤油味だから、どうもこちらの方々の舌には合わないのではないかと思ったが、残った煮汁がなくなる案配で大変好評。次に天ぶら、チャーハンといった感じ。ソースが今一だったお好み焼きはやはり残りがち。味のうまい・まずいにはあまり国境はないのだろうと思う。食事後、パレスチナの音楽を100dBもあるような大きな音でかけて踊り出す。私も引き吊り出されるが、どうもあのダンスとか踊りと言うのは小学校時代から苦手とする一項で何としても断ってしまう。申し訳ないが、できないものはできない。その後、歌を歌ったりと大騒ぎを11時近くまでする。

家を出てタクシーをつかまえるために、20分ほど歩く。この間、ユーセフとアシュラフとずーっと話す。今回のこと。本当に良い機会であったということ。ユーセフもアシュラフも一度は日本に行きたいという「夢」を持っていること。私にこの企画について相談されたときは「夢」のように思ったけれども、Dreams Come Trueであること。タクシーで去る。最後まで見守ってくれた。もう会えないかもしれないと思う……。 (つづく)

今回、私の訪問は下記のNGOから委託されたものでした。NGOを応援して下さい！。

「パレスチナ子供のキャンペーン」〒169 新宿区百人町2-22-15 山権ビル3F

TEL : 03-3360-9406、FAX : 03-3360-9439